

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

**平成 25 年度～平成 27 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」  
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 創価大学                      2 大学名 創価大学

3 研究組織名 教育・学習支援センター

4 プロジェクト所在地 東京都八王子市丹木 1-236

5 研究プロジェクト名 協同教育研究推進プロジェクト

6 研究観点 大学の特色を生かした研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
関田一彦	教育学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数 5 名

9 該当審査区分 理工・情報      生物・医歯      人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
関田一彦	教育学部・教授	大学における協同教育のプログラム開発	プロジェクト統括・概念整理と理論構築
望月雅光	経営学部・教授	大学における協同教育のプログラム開発	実験設備の整備・運用
富岡比呂子	創価教育研究所・講師	大学における協同教育のプログラム開発	質問紙調査と量的データ分析
舟生日出男	教育学部・准教授	大学における協同教育のプログラム開発	実験設備の整備補助
山崎めぐみ	学士課程教育機構・准教授	大学における協同教育のプログラム開発	実験授業の実施と質的データ分析
(共同研究機関等)			

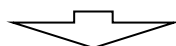
法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
大学における協同教育のプログラム開発	教育学部・准教授	舟生日出男	実験設備の整備補助
大学における協同教育のプログラム開発	創価教育研究所・講師	富岡比呂子	変更なし

(変更の時期:平成26年4月1日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
教育学部・准教授	教育学部・教授	舟生日出男	変更なし
創価教育研究所・講師	教育学部・准教授	富岡比呂子	変更なし

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

目的・意義

大学教育における協同的な学びに関する実践的研究は、1980年代以降、アクティブラーニング、ピア・インストラクション、Leaners' autonomy、Student engagementといったキーワードで語られ、世界的にもその研究的関心が高まっている。しかし我が国の大学教育においては、未だに海外の実践紹介や技法導入が主流であり、協同の教育的意義を体系的・学際的に研究し、その実践可能性を具体的に検証する試みは発展途上である。

中教審答申ではアクティブラーニング(能動的学習)が注目され、全入時代の大学においては、社会人基礎力に象徴される汎用的能力育成の方途として導入が進み始めたところであるが、大学教員の関心は未だに一斉講義の成果としてペーパーテストで測れる学習の認知的側面に偏ったままである。アクティブラーニングは学習内容の理解・定着、そして創造に優れた教育方法であると同時に、他者との関係性のなかで人間的成長を促す良質な学び(協同的な学び)を具現化する方途でもある。

加えて、学生の自立やアイデンティティの形成が強調される中で、自立を準備する協同の価値は未だ十分に検証されず、その意味で「協同」の教育効果に注目した新たな教育理論が求められている。そこで本研究では、協同教育という新たな枠組みを整理・構想し、大学教育の改善に資することを目的とする。

研究の観点

本プロジェクトは、様々な指導法による協同的な学びの創出メカニズムの研究を通じて、新たな教育理論の構築を目指すものである。特に、研究の観点として「大学の特色」を生かすことが意図されている。本学の特色として、多くの教員が建学の理念である「人間教育」の具体化に実践的関心を持っている点があげられる。

本プロジェクトの中核メンバーが関わる(兼務する)、本学のFD機関である教育・学習支援センターでは、その設置以来 15 年間にわたり、人間教育に向けた授業方法として協同学習を推奨し続けている。そうしたFD活動を背景に、本学はすでに多様なアクティブラーニングが実践されているが、その効果検証や授業改善に向けた研究は十分ではない。そこで、全国的

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

に大学教育の変革が進むこのタイミングに、アクティブラーニングを実施する際の教育的課題を、本学の特色を生かして研究することで、その成果を学術面のみならず、広く日本の大学の教育実践上にも還元できると考えた。

#### 計画の概要

本プロジェクトでは、大きく二つの活動を行った。一つは、公開勉強会をはじめ、専門家への聞き取りや文献調査を含め、協同教育の概念整理と理論構築の試みである。

もう一つは、実験設備を活用した研究である。研究調書の段階では5つの具体的研究課題を挙げていた。

①アクションラーニング(質問会議)ではコーチの導きにより学習者の気づきが内省に深化する。この深まりを生むグループダイナミクスを分析し、通常の授業におけるグループ学習の質改善の方途を明らかにする。

②建設的討論法で行われる葛藤を含む討議において、視点交換を行うことで問題の本質的理解が促進される。このとき、討議の主体者相互の共感的対峙を可能にするプロトコルを解明し、対立を創造に変えるコミュニケーションスキルの訓練を学習活動に埋め込む方法を開発する。

③LTD 方式の話し合い学習では、同一教材に対する理解・解釈の違いを埋め合う作業が重要である。その作業を促進させるメンバー間の相互作用についてビデオ分析し、教師の効果的な介入方法を明らかにする。

④学習者の自立を促す協同的な学びを維持・発展させるために有効な内省支援システムを開発する。

⑤継続的なグループ活動を通じて自律的学習態度の育成・強化を試みる場合に、グループメンバーの学習特性とコミュニケーションスキルが大きく影響する。これらの要因の最適な組み合わせパターンを分析し、学生の人間的成長に資するプロジェクト学習の指導法を確立する。

#### (2) 研究組織

本プロジェクトは、学士課程教育機構に属する教育・学習支援センター(以下、CETL と略す)が中心になって取り組んだ。研究代表者の関田一彦は CETL のセンター長であり、平成 18 年度「大学教育の国際化推進プログラム」に採択された取組『協同教育の先進的国際センターを目指して』の推進者である。彼の下で、CETL のセンター員である山崎めぐみは実験授業を担当し、富岡比呂子は量的データの収集・分析を行った。

本プロジェクトのカギになる実験教室のシステム開発に関しては、CETL の副センター長であり、平成 19 年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択された『学生が協調に作問可能なWBT(Web Based Training)システム』の中核メンバーであった望月雅光が主導した。これに協調学習支援システム開発を専門とする舟生日出男が協力した。

#### 研究支援体制

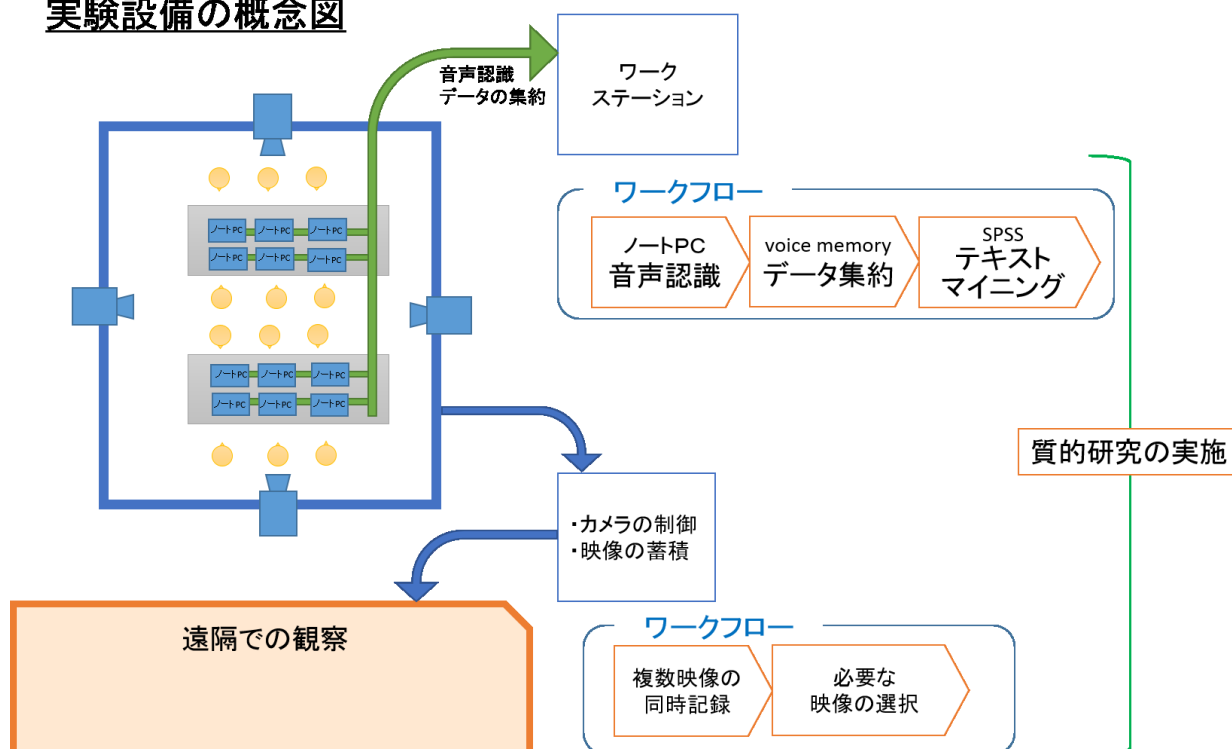
本プロジェクトにかかる事務的業務は、学士課程教育機構を所轄する総合学習支援オフィスの山岸啓一が担当した。また、プロジェクト推進上、CETL 特別センター員として三津村正和(平成 25 年度)、研究補佐員として小畑良枝(平成 26 年度)、森川由美(平成 27 年1月から平成 28 年 3 月)を雇用した。三津村、小畑、そして森川の指示の下、質的データの整理を主な作業とする学生アルバイトを複数名雇用した。また、実験協力者を学生から有償で募り、短期学生アルバイトとして多数雇用した。

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

### (3) 研究施設・設備等

本プロジェクトで整備した実験設備は、当初、教育 A 棟 2 階の A206 教室 (120 m<sup>2</sup>) に設置したが、新総合教育棟竣工後の教室調整により、平成 27 年 9 月に C 棟 5 階 C501 教室 (C-Lab と呼称) へ移設した。本設備は概念図に示すように、グループ活動を複数のアングルから録画し、メンバー間の非言語コミュニケーションを記録・分析できる。また、音声認識ソフトを搭載したノート PC により、音声データの文字化を行い、テキストマイニングによる分析も可能である。

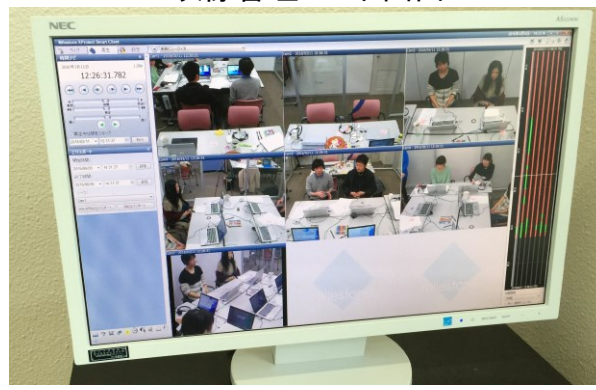
#### 実験設備の概念図



音声認識 PC と映像収録機器



映像管理モニタ画面



この実験設備は、演習のような小規模の通常授業にも使用可能である。実際の授業に即して使うことで、協同的な学びの創出メカニズムの解明を行うことができる。さらに、実験室での授業進行は併設する観察ブースから観察できるので、教員の授業改善研修の機会提供にもなる。

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び\*を付すこと。

本プロジェクトでは、大きく二つの活動を行った。一つは、協同教育の概念整理と理論構築の試みであり、もう一つは、実験設備を活用した実践研究である。

#### 1. 協同教育の概念整理と理論構築

協同的な学びの本質と実態を考究するにあたり、学習動機づけ研究、特にピア・インタラクションの観点からの先端的研究動向を、それぞれ名古屋大学の中谷、京都教育大学の伊藤、三重大大学の中西を講師とする勉強会で検討した。協同教育の実践的知見については、中京大学の杉江、名古屋市立桜台高等学校の水野、参画文化研究会の林、静岡大学の益川、関西大学の森、九州女子大学の川野、久留米大学の須藤を招聘してそれぞれ勉強会やワークショップを行った。

関連して、協同学習と体験学習の関係性・共通性について、南山大学の津村と意見交換した。協同の身体性、あるいは演劇活動の協働性について東京学芸大学の渡辺、文化心理学的視点から「協同性」の遺伝的ルーツについて、ミシガン大学の北山から教えを受けた。

関田は、上記の一連の勉強会を踏まえ、協同教育の視点からアクティブラーニングの実践的特徴を整理し、\*「AL の諸技法:参加と協働を念頭に」(安永・関田・水野編著『アクティブラーニングの技法・授業デザイン』東信堂に所収)および\*「アクティブラーニングを生徒指導に活かすとは」(関田・渡辺編著『アクティブラーニングを生徒指導に活かす』学事出版に所収)と題する2本の論考をまとめた。

また、大学の特色を生かし、本学で取り組まれているアクティブラーニングの事例を収集・整理し、Web サイト(<http://pace.soka.ac.jp/>)上に14ほどの授業事例を公開している。これは、今後も順次、追加・更新される。この具体的事例収集の過程で、\*「創価大学におけるTBL 導入の試み」、\*「協同教育から見たフォーラムシアター」(いずれも創価大学教育学論集65号に所収)、\*「授業に使うマインドマップ」(『授業に生かすマインドマップ』ナカニシヤ出版に所収)、\*「意味ある学習を意識した授業デザイン」(松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房に所収)をまとめ、それぞれのアクティブラーニング実践について解説している。加えて、本プロジェクト参加者を中心に、アクティブラーニングを実践する教師のあり方に焦点を当てたWeimer (2013)の Learner-centered teaching を翻訳出版する(\* 関田監訳(印刷中)『学習者中心の大学授業』勁草書房)。

このような関連概念整理を重ねた成果を日本協同教育学会第12回大会において報告した(以下に要旨を記す)。また、勉強会の講義録をもとにした論集を現在編集しており、年度内発刊を目指している。

#### 大会発表要旨

##### 1) 問題の所在

大学教育では数年来、主体的・能動的な学習を具現化する方途として、アクティブラーニングの導入が強調されてきた。「アクティブラーニング」をどう捉えるか、必ずしも統一見解があるわけではない。そのため、現場では従来通りのグループ学習に終始しているケースも多い。協同教育の視点から、どのようなアクティブラーニングを志向すべきか、今まで以上に積極的に発信する必要がある。

##### 2) 学習科学の台頭

反転授業という呼称とともにICTを活用した学習が普及し、個人の学習能力による知識理解量の格差増進が試みられている。人はどのように学ぶのか、特にその理解のプロセスを研究し、教育改善に役立てようとする研究分野に学習科学がある。様々な技術革新によって学習のプロセ

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

スの詳細が明らかになるにつれ、知識の構造化あるいは関連付けの広がりなど、その質を検証することが容易になってきた。

一方で、内容の深い理解（質）と、その理解に至る学習体験（意義）とは同じものではない。質を論じるとき、比較可能な汎用的基準が想定されるだろう。しかしながら、意義を論じるとき、当事者特有の基準が前提とされるであろう。

### 3) アドラー心理学など人間性心理学の興隆

アドラーが提唱する「共同体感覚」の醸成は、協同教育においても大きな関心事であり、協同学習の実践家にとって、自らの実践の良し悪しを考えるうえで意識したいところである。子どもたちが劣等感をバネに有能になっていくその先に、自他ともに必要とされ役立ち合える「共同体」を仮設するアドラーの考え方は、協同教育の思想的支柱の一つと捉えることができる。アドラー心理学以外にも、人間の可能性を積極的に認め、様々な対人的・社会的課題の達成・解決に資する心理学の新たな潮流が認められる。それらは、協同学習の理論的支柱であるグループダイナミクスの視点を取り込み、より包括的な人間の成長を考える枠組みを与えてくれる。

### 4) 評価観の変化

「生きる力」の育成が叫ばれてから久しいが、人間力（コンピテンシー）を育てることが学校教育の目的として改めて強調されている。協働・協調は学習評価の対象になるのである。協同の精神の涵養は教育目標である。

### 5) まとめ

50年を超える歴史を持つ協同学習は、その歴史ゆえに新しい言説や手法に安易に置き換えられようとしている。温故知新の言葉どおり、新しい理論や技術を協同をキーワードに繋ぎ、協同教育の世界に布置していく作業が今、強く求められている。

## 2. 実験設備を活用した実践研究

①アクションラーニングではコーチの導きにより学習者の気づきが内省に深化する。この深まりを生むグループダイナミクスを分析し、通常の授業におけるグループ学習の質改善の方途を明らかにする。

この取組みについては、学生コーチ用のスクリプトを作成・改良し、その指示や手順の違いによってアクションラーニングのセッションがどのように進み、参加者の気づきや満足度に影響を与えたのか、映像記録を分析することで明らかしようとした。効果的なスクリプトの原案は完成したが、そのスクリプトをもとに行ったコーチの経験が、通常のグループ学習の際に、どの程度生かされるかを判定する実証研究はこれからである。

②葛藤を含む討議において、討議の主体者相互の共感的対峙を可能にするプロトコルを解明し、対立を創造に変えるコミュニケーションスキルの訓練を学習活動に埋め込む方法を開発する。

開発した訓練プログラムは、\* 関田・嶋田・森川(2016)「相互評価力育成プログラム開発の試み」として公表した。なお、このテーマについて取り組む中で、対立を避け表面的な共感にとどまる傾向を持つ学生が散見された。こうした心理的抵抗の高低に応じた訓練メニューの開発は今後の課題である。

③LTD 方式の話し合い学習では、同一教材に対する理解・解釈の違いを埋め合う作業が重要である。その作業を促進させるメンバー間の相互作用についてビデオ分析し、教師の効果的な介入方法を明らかにする。

この課題に関して、学生たちの相互作用を分析していくと、相互作用を通じて学習を促進さ

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

せる学生とそうでない学生との違いが見出された。そこで、そうした学生たちの心理特性の違いを調べ、心理特性に対応した教師の介入方法を検討した。その成果の一部は、\* 嶋田・富岡・森川(2016)「アクティブラーニングに向く学生・向かない学生を探る。－ジグソー法・LTD話し合い学習法の分析から－」と題して発表した。

④学習者の自立を促す協同的な学びを維持・発展させるために有効な内省支援システムを開発する。

この課題は、実験施設の移動にともなうシステムの休止など、不測の事態への対応で十分な時間がとれず、成果発表の段階に至っていない。アクションラーニングの実証研究と合わせて今年度内の成果報告を目指す。

⑤継続的なグループ活動を通じて自律的学習態度の育成・強化を試みる場合に、グループメンバーの学習特性とコミュニケーションスキルが大きく影響する。これらの要因の最適な組み合わせパターンを分析し、学生の人間的成長に資する指導法を確立する。

このテーマについては、心理・学習特性を測る 2 つの指標を作成した(\* 関田・他(2016)「創価大学におけるハイパーフォーマー指標開発の試み」、\* 松尾・他(2016)「学生向けストレス認識尺度の作成」)。今後、2 つの指標を組合せ、継続的なアクティブラーニングが学生の人間的成長に与える効果を検証していく。

#### <優れた成果が上がった点>

大学教育においても、「協同」に集約される人間関係を前提とする学習活動の有効性が、さまざまな研究分野から指示され得ることが確かめられた。また、協同を生起・深化させる学習活動を促進するスキルや態度について実践的知見が得られた。

#### <課題となった点>

中央教育棟の竣工に伴い、当初想定しない教室調整が必要となり、実験設備の移設を余儀なくされ、結果としていくつかの実験が中止・縮小となった。

#### <自己評価の実施結果と対応状況>

今年度に開所予定の協同教育研究開発センターにおいて、本プロジェクトの総括を行う。

#### <外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

3年間のプロジェクトであり、実施せず。

#### <研究期間終了後の展望>

本プロジェクトは、本学教育理念の具現化に向けた教育方法研究の一環として捉えている。研究期間中は教育・学習支援センターの活動の延長として、センターに関係する教員を中心にした機器活用に留まっていた。今後は、より一層、全学に開かれた教育・研究設備として、学士課程教育機構内に協同教育研究開発センターを置き、新しいセンターの下で活用を進める。

さらに実験を重ねる必要のある研究など、いまだ公表段階に至らないものは、順次、成果がまとまり次第、Web で発信・公開していく予定である。

#### <研究成果の副次的効果>

本学のピアサポーター養成プログラムに、本プロジェクトで開発したトレーニングプログラムの一部を次年度より導入する予定になっている。

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 協同教育 (2) アクティブラーニング (3) 協同学習  
 (4) 共感的対峙 (5) 相互評価 (6) 心理特性  
 (7) \_\_\_\_\_ (8) \_\_\_\_\_

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには\*を付すこと。

#### <雑誌論文>

- \* 関田一彦・嶋田みのり・森川由美(2016)「相互評価力育成プログラム開発の試み」教育学論集 67 号, 119-132. 創価大学教育学部
- \* 松尾美香・山崎めぐみ・望月雅光・関田一彦 (2016)「学生向けストレス認識尺度の作成」教育学論集 67 号, 133-141. 創価大学教育学部
- \* 関田一彦・嶋田みのり・望月雅光・森川由美・田川咲紀(2016)「創価大学におけるハイパフォーマー指標開発の試み」教育総合研究叢書 9 号, 49-56. 関西国際大学教育総合研究所
- \* 関田一彦・山中馨(2014)「創価大学における TBL 導入の試み」教育学論集 65 号, 83-109. 創価大学教育学部
- \* 三津村正和・関田一彦(2014)「協同教育から見たフォーラムシアター」教育学論集 65 号, 111-124. 創価大学教育学部

#### <図書>

- \* 関田一彦・渡辺正雄 編著(2016)『アクティブラーニングを活かした生徒指導』学事出版
- \* 関田一彦・渡辺貴裕・仲道雅輝(2016)『教育評価との付き合い方—これからの教師のために』さくら社
- \* 関田一彦・山崎めぐみ・上田誠司(2016)『授業に生かすマインドマップ: アクティブラーニングを深めるパワフルツール』ナカニシヤ出版
- \* 安永 悟・関田 一彦・水野 正朗 編著(2016)『アクティブラーニングの技法・授業デザイン(アクティブラーニング・シリーズ1)』東信堂
- \* 関田一彦・三津村正和(2015)「意味ある学習を意識した授業デザイン—教師としての素養を学び磨くというストーリー」松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房に所収(なお、この本は Routledge 社から英訳されて出版の予定)
- \* 関田一彦監訳(印刷中)『学習者中心の大学授業』勁草書房

#### <学会発表>

- 松尾美香・望月雅光(2016)「アクティブ・ラーニングを活用した高大連携による入学前教育」大学教育学会第 38 回大会, 立命館大学
- \* 嶋田みのり・富岡比呂子・森川由美(2016)「アクティブラーニングに向く学生・向かない学生を探る。—ジグソー法・LTD 話し合い学習 法の分析から—」第 22 回大学教育研究フォーラム, 京都大学
- 森川由美(2015)「ジグソー法における足場かけ」日本協同教育学会第 12 回大会、久留米大学
- \* 関田一彦(2015)「『協同教育と協同学習』再訪」日本協同教育学会第 12 回大会、久留米大学



法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

#### <研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

本プロジェクト専用の Web ページ(<http://pace.soka.ac.jp/>)を開設し、創価大学教育・学習支援センターの HP にリンクした。

2016 年 2 月 27 日、研究成果の公開と更なる研究交流を兼ねて、国際シンポジウム「協同教育の展望と課題」(パネリスト: Dr. L.Baloche / Dr. S.A.M.Reza)を創価大学で開催した。

<これから実施する予定のもの>

2016 年度内に協同教育研究開発センターの開所記念セミナーを開催し、本プロジェクトの成果を整理・公開する。

#### 14 その他の研究成果等

本プロジェクトでは、協同教育を構成するさまざまな専門領域の知見を共有し、その関連を整理する目的で、計 13 回の公開勉強会を開催した。

《平成 26 年度》

- ◆ 第1回プロジェクト勉強会「ピア・ラーニング 学びあいの教育心理学理論と実践」(話題提供者:名古屋大学中谷素之教授) 2014 年 6 月 12 日
- ◆ 第2回プロジェクト勉強会「協同学習の実践的理解」(話題提供者:名古屋市立桜台高等学校水野正朗先生) 2014 年 8 月 3 日
- ◆ 第3回プロジェクト勉強会「動機づけ・学習行動の視点から考えるアクティブラーニング」(話題提供者:三重大学中西良文准教授) 2014 年 9 月 26 日
- ◆ 第4回プロジェクト勉強会「学習科学の視点から考える協同的な学び」(話題提供者:静岡大学益川弘如准教授) 2014 年 12 月 11 日
- ◆ 第5回プロジェクト勉強会「ドラマ／演劇的手法を用いた学習と協同性」(話題提供者:東京学芸大学渡辺貴裕准教授) 2015 年 1 月 6 日
- ◆ 第6回プロジェクト勉強会「LTD 話し合い学習法」(話題提供者:久留米大学須藤文先生) 2015 年 3 月 4 日
- ◆ 第7回プロジェクト勉強会「ケース教材を使用した討論型授業の実践(ケースメソッド授業)」(話題提供者:九州看護福祉大学川野司教授) 2015 年 3 月 5 日

《平成 27 年度》

- ◆ 第1回プロジェクト勉強会「『わかった』の深さについて考える—アクティブラーニング再考」(話題提供者:関西大学森朋子准教授) 2015 年 6 月 1 日
- ◆ 第2回プロジェクト勉強会「心の文化的多様性—その起源を考える—」(話題提供者:ミシガン大学北山忍教授) 2015 年 6 月 5 日
- ◆ 第3回プロジェクト勉強会「協同学習で進めるアクティブな学び」(話題提供者:中京大学杉江修治教授) 2015 年 7 月 10 日
- ◆ 第4回プロジェクト勉強会「ラボラトリー体験学習を再考する—Tグループを中心に—」(話題提供者:津村俊充・南山大学名誉教授) 2015 年 7 月 16 日
- ◆ 第5回プロジェクト勉強会 特別企画「『ラベル』の使い方のワークショップ」(講師:林義樹 参画文化研究会代表) 2015 年 8 月 26 日
- ◆ 協同教育ワークショップ「英語を使った授業における協同学習」(講師: Lynda Baloche 国際協同教育学会会長) 2016 年 2 月 28 日

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

## 15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

「大学の特色との関連が不明である。」

<「選定時」に付された留意事項への対応>

創価大学は平成 26 年度大学教育再生加速プログラム申請に際し、CETL 開所以来、15 年間一貫して協同学習を導入推奨してきた実績を謳っている。大学の教育理念に沿った教育方法として協同学習を研究・開発することは、本学にとって重要課題であり、本プロジェクト終了後は、協同教育研究開発センターを開設し、研究・開発を継続する。このように、本学の教育施策の中に、本プロジェクトが位置づけられること自体、人間教育の最高学府を目指す本学の特色と考える。

<「中間評価時」に付された留意事項>

該当なし

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

該当なし

法人番号	131041
プロジェクト番号	S1312003

## 16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他( )	
平成25年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	6,926	3,193	3,736				
	研究費	13,248	7,742	5,506				
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	9,013	4,642	4,371				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	9,180	4,761	4,419				
平成年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	0						
平成年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	0						
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	6,926	3,193	3,736	0	0	0	0
	研究費	31,441	17,145	14,296	0	0	0	0
総計	38,367	20,338	18,032	0	0	0	0	

法人番号

131041

## 17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
<H25~27> 文系A棟(2階A206)		65㎡					
<H27> 文系C棟(5階C501)		62㎡					

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m<sup>2</sup>

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h h h			
(研究設備) グループ学習記録システム	平成25年		1式	220 h	6,926	3,786	私学助成
(情報処理関係設備) PC Workstation	平成25年	Z230SFF	1式	110 h	522	217	私学助成
ノートPC VAIO	平成25年	SVP1321A2J	4台	2800 h	862	358	私学助成
ノートPC Lavie Gタイプ	平成26年	PC-GN206Y	2台	500 h	489	237	私学助成
				h h			

## 18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 25 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	2,222	記録メディア、文具、トナー	2,222
光熱水費	0		0
通信運搬費	3	郵便代	3
印刷製本費	483	パンフレット、資料作成	483
旅費交通費	559	先進事例訪問調査	559
報酬・委託料	7,916	ウェブサイト作成	7,916
(研究協力者金)	220	調査研究協力者謝金	220
(新聞図書費)	152	研究書籍代	152
(学会参加費)	18	学会参加費	18
計	11,573		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	288	アルバイト人件費	288
教育研究経費支出			
計	288		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	1,384	PC, ノートPC	1,384
図 書			
計	1,384		
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		

法人番号

131041

(千円)

年 度	平成 26 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
主 な 内 容			
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,515	記録メディア, 文具, トナー	1,515
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	1	郵便代	1
印 刷 製 本 費	0		0
旅 費 交 通 費	1,754	先進事例訪問調査	1,754
報 酬・委 託 料	548	ウェブサイト作成	548
(研究協力者金)	0		0
(会費)	10	学会参加費	10
(新聞図書費)	196	研究書籍代	196
計	4,024		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼務職員)	4,496	アルバイト人件費	4,496
教育研究経費支出			
計	4,496		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	489	ノートPC	489
図 書			
計	489		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		

(千円)

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
主 な 内 容			
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	264	記録メディア, 文具, トナー	264
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	0		0
印 刷 製 本 費	0		0
旅 費 交 通 費	1,430	先進事例訪問調査	1,430
報 酬・委 託 料	1,801	ウェブサイト改修委託	1,801
(研究協力者金)	0		0
(会費)	99	学会参加費	99
(新聞図書費)	135	研究書籍代	135
計	3,729		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼務職員)	5,451	アルバイト人件費	5,451
教育研究経費支出			
計	5,451		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品			
図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		